

『三大部廬談』についての一考察

——叡山文庫蔵本・園城寺蔵本・身延文庫蔵本など諸伝本の検討から——

渡辺 麻里子

はじめに

『三大部廬談』は、廬山寺第三世明導上人照源（一二九八～一三六八）による天台三大部の講義録である。およそ暦応三年（一二三〇）四十三歳の時から、貞治六年（一二六七）七十歳に至るまでの毎年、比叡山東塔南谷西尊院の夏安居で三大部を講義したものである。「廬談」とは、廬山寺の談義という意味であるが、書名としては総称として用いられている。『続天台宗全書』には義科『廬談』が所収されているが、『三大部廬談』は『廬談』のうちで『三大部』を講義したものを指す。

『三大部廬談』または『三大部見聞述聞』という書名はいずれも通称で、実際に原本に記される書名は、『玄義見聞』『玄義第一（一十）本書聞書』『玄義聞書』『玄義述聞』『玄義述聞抄』などと様々である。また『玄義見聞』『玄義聞書』などの書名は一般名詞であり、廬山寺の談義に特定して用いられている語ではないために書名から内容は判断できず、注意が必要である。

この度、『三大部廬談』の諸伝本を調査する機会を得て、諸本全体を確認することができた。その結果、天台系寺

院の諸伝本の関係が判明した。また日蓮宗の総本山である身延山久遠寺身延文庫の所蔵本が、天台系寺院より古い写本であることも確認できた。本稿は、園城寺蔵本や身延文庫蔵本を通じて『三大部廬談』の意義を検討するものである。

一、『三大部廬談』の概要

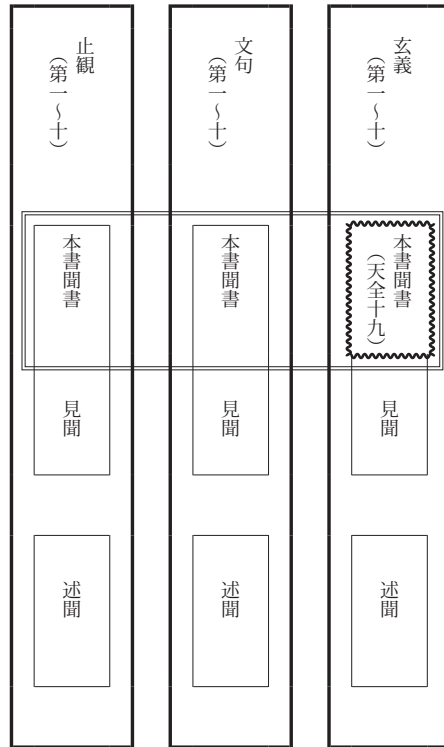
『三大部廬談』（別名『三大部見聞述聞』）は、廬山寺第三世明導上人照源（一二九八～一三六八）による天台三大部の講義録である。

廬山寺は、現在は京都市上京区北之辺町に所在する天台円淨宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来である。元三大師良源が天慶三年（九三八）に北山に与願金剛院を創建したのが始まりと伝えられる。寛元三年（一二四五）に後嵯峨天皇の勅により船岡山麓に移ったという。また、住心覚諭の中興で、比叡山の僧であった住心覚諭は、はじめ洛北の出雲路に与願金剛院を開くが、中国の廬山惠遠の靈告を感じて、寺名を廬山寺と号した。後に比叡山から二条猪熊の地に隠棲し、盛んに講義を行っていた本光禅仙に付嘱したという。禅仙は船岡山に堂塔伽藍を建立し、「日本廬山天台講寺」と称してその一世となった。そして廬山寺は、天台・法相・真言律・淨土の四宗兼学の学問道場として発展した。二世禅月心善を経て、三世明導照源、四世実導仁空（一三〇九～一三八八）に至る。三世明導照源と四世実導仁空の講説には、多くの学徒が集まり、後にこの明導と仁空の講説をまとめて「廬談」と称して重用した。十四世紀から十六世紀の天台談義書には、廬山寺の教学が「廬談」「廬師云」などとして多く引用されている。なお現在の地は、天正年中、豊臣秀吉によって船岡山麓から移されたものである。

『三大部廬談』は、明導が比叡山東塔南谷西尊院の夏安居で三大部を講義したものである。『三大部廬談』は、別名『三大部見聞述聞』ともいうが、それは「三大部見聞」と「三大部述聞」を合わせたものだからである。「(三大部)見聞」

と「(三大部) 述聞」は、同時の聞書であるが内容が異なる筆録となっている。これらの内容構成を図示すると以下のようになる。

〔図〕『三大部廬談』全体構成図



「三大部見聞」は「玄義見聞」「文句見聞」「止観見聞」から、「三大部述聞」は「玄義述聞」「文句述聞」「止観述聞」から構成される。また『三大部廬談』のうち「見聞」には「本書聞書」も含まれ、「述聞」とは区別されている。現在、「本書聞書」のうち玄義のみが『天台宗主書』第十九巻に翻刻されている（波線の囲み部分。ただし「玄義第五」を欠く）。「玄義見聞」「文句見聞」「止観見聞」のそれぞれに第一〜第十まであり、第一〜第十のそれぞれの冊数は区々である。

同様に「玄義述聞」「文句述聞」「止観述聞」も第一―第十まであり、それぞれの冊数は様々である。

見聞と述聞の区別は、外題・内題などに明確に記されていないために曖昧な点があり、現在の所蔵者によつてその区分・分類が異なっている。一応の原則としては、見聞は顯幸の筆録、述聞は澄空・直海などの筆録とされてきた。『天台宗王書』の解説では、「述聞は、同聞聴衆の多筆を採録」としている。実際に写本では、元奥書などから複数の筆者が確認できる。例えば観応二年（一三五一）四月一六日―二六日にかけて玄義第二の談義が行われているが、その日の筆録としては、「本書聞書」の他、「見聞」が一種、「聞書」が一種、「述聞」が一種、確認できている。

三大部の談義注釈はもとより『廬談』だけではない。現在『廬談』としてまとめられている諸伝本の中には、園城寺北林坊尊契の談義や、嵯峨院の談義、「奥師」（猪熊奥坊）の談義、「実師」（実蔵坊）の談義などが混在している。『渋谷目録』⁽¹⁾においては園城寺北林坊尊契の談義を別項に立てているが、多くの伝本は、『三大部廬談』の中に、尊契や奥師・実師の談義が混在した状態になっている。嵯峨院の談義や奥師・実師の談義は明導照源より時代が前のものであり、尊契の談義は時代が後のものである。こうした混乱は近世初期にはすでに生じていたようで、それに気付いて分別整理を行った目録が作成されている。⁽³⁾

二、『三大部廬談』の諸伝本

『三大部廬談』のこれまで確認した伝本は、以下の通りである。⁽⁴⁾ いずれも写本で、版本はない。

A 叡山文庫別当代蔵本十戒光院蔵本 写本八四冊十三三冊（『渋谷』⁽⁵⁾）

B 叡山文庫毘沙門堂蔵本 写本一四一冊（『渋谷』）

- | | |
|-------------------|--------------|
| C 叡山文庫真如藏本 | 写本二四一冊（『渋谷』） |
| D 妙法院門跡藏本 | 写本二三三冊（『渋谷』） |
| E 西教寺正教藏本 | 写本一一三冊（『渋谷』） |
| F 園城寺藏本 | 写本一一五冊（新） |
| G 身延山久遠寺身延文庫藏本（甲） | 六冊（新） |
| H 身延山久遠寺身延文庫藏本（乙） | 三冊（新） |
| I 身延山久遠寺身延文庫藏本（丙） | 一八冊（新） |

このうち、A～Eの諸本は『渋谷目録』に掲載があるが（但しAは別当代本のみが記載あり、戒光院本は記載がない）、F園城寺藏本とG H Iの身延山久遠寺身延文庫藏本は、これまで知られていなかった伝本である。現在のところ存在が確認できたのはA～Iの九種の伝本で、これらの写本について、諸伝本の冊数とその内訳を一覧するために（表二）『三大部廬談』伝本一覧を作成した。

〔表一〕『三大部廬談』伝本一覽 (漢数字は冊数)

総計	述聞				見聞				
	小計	止観	文句	玄義	小計	止観	文句	玄義	
一二六	六〇	二三	二五	一二	六六	三一	一七	一八	園城寺
一三三	六三	二二(列6)	二二(張1)	二〇(列1)	七〇	三三(宿2)	一八(辰3)	一九(晨7)	妙法院門跡
一四一	六一	二二	二四	一五	八〇	三九	二二	二〇	叡山文庫 真如藏
一四一	六七	二二	二三	二二	七四	三五	一九	二〇	叡山文庫 毘沙門堂
八四	四七	二二	二五	一	三七	一	一九	一八	叡山文庫 別当代
三三三	一六	一	一	一六	一七	一七	一	一	戒光院
一一三	六〇	二二	二五	一三	五三	二四	一六	一三	西教寺 正教藏
一三二	四九	二一	二〇	八	八二	三九	一九	二四	見述 目録
六	二	一	二	一	四	一	四	一	身延 甲
三	三	一	三	一	一	一	一	一	身延 乙
一八	一二	一	一二	一	六	一	六	一	身延 丙

六部(三大部の見聞と述聞)が揃っているのは、園城寺蔵本、妙法院門跡蔵本、叡山文庫真如蔵本、叡山文庫毘沙門堂蔵本、叡山文庫別当代＋戒光院蔵本、西教寺正教蔵本の六種である。所蔵によって調卷の違いがあり、叡山文庫別当代蔵本と戒光院蔵本は、もと首楞嚴院蔵本で一具であったものが、現在は別当代と戒光院に分かれて所蔵されているもので、この一覧表ではまとめて記載した。また伝本ごとに内容は同じでも調卷に差があり、園城寺蔵本では一冊のものが、妙法院門跡蔵本では二冊に分冊されている場合もあるため、冊数の多寡がそのまま内容の差になる訳ではない。

Aの叡山文庫別当代蔵本十戒光院蔵本は、もと「首楞嚴院」蔵本の一具であつたものが分かれて所蔵されているものである。別当代蔵本『三大部見聞』『三大部述聞』全八四冊は、以下の様な内訳である。

- ・玄義見聞 一八冊（別当代・内・六・一七・五〇）
- ・文句見聞 一九冊（別当代・内・六・二〇・五一）
- ・止観見聞 ナシ
- ・玄義述聞 ナシ

- ・文句述聞 二五冊（別当代・内・六・二一・五三）
- ・止観述聞 二二冊（別当代・内・六・二七・五二）

法量は縦二六・七×横二〇・一糎。表紙は栗皮無地、外題はナシ。料紙は楮紙打紙、一面十行書、隠丁付がある。この書式は、妙法院蔵本・園城寺蔵本とも同じである。扉と奥書に、書写者と校訂者の署名が入り、各冊裏見返に、大字で「文見十九卷内／山門楞嚴院蔵／寛永十九年六月日」などと記される。

叡山文庫戒光院蔵本全三三冊の内訳は以下の通りで、別当代の欠けている部分に符合する。

- ・止観見聞 一七冊（戒光院・内・六・九三・一二四）
- ・玄義述聞 一六冊（戒光院・内・六・五九・一〇八）

法量は法量は縦二六・七×横二〇・一糎。表紙は栗皮無地、外題はナシ。料紙は楮紙打紙、一面十行書、隠丁付がある。装訂・書式ともに、別当代蔵本と一致する。また扉と奥書に、書写者と校訂者の署名が入り、各冊裏見返に、大字で「止見卅七冊内／山門楞嚴院蔵／寛永十九年六月日」などと記されるのも、別当代蔵本と一致するため、一具のものとなる。

B 叡山文庫毘沙門堂蔵本『三大部見聞』『三大部述聞』全一四一冊は、次のような内訳である。⁽⁶⁾

- ・玄義見聞 二〇冊（毘沙門・内・六・二四・七七）

・文句見聞 一九冊（毘沙門・内・六・二五・七九）
 ・止観見聞 三五冊（毘沙門・内・六・二八・八一）
 ・玄義述聞 二二冊（毘沙門・内・六・二一・七八）
 ・文句述聞 二三冊（毘沙門・内・六・二二・八〇）
 ・止観述聞 二二冊（毘沙門・内・六・二三・八二）
 法量は縦二七・三×横二〇・三糎、表紙は朱色無地である。表紙には「公海」の墨書署名があり、「公海蔵」の墨印が押される。料紙は楮紙打紙で、一面十行書、隠丁付があるのも、別当代・戒光院蔵本、妙法院蔵本、園城寺蔵本と一致する。

Cの叡山文庫真如蔵本は、全一四一冊の写本で、内訳は以下の通りである。

- ・玄義見聞 二〇冊（真如・内・三・二七・一九〇）
- ・文句見聞 二一冊（真如・内・三・三一・二二〇）
- ・止観見聞 三九冊（真如・内・三・二五・二二三）
- ・玄義述聞 一五冊（真如・内・三・二六・一九七）
- ・文句述聞 二四冊（真如・内・三・三〇・二〇八）
- ・止観述聞 二二冊（真如・内・三・二三・二三八）

法量は縦二六・五×横一九・三糎、表紙は栗皮無地。外題は、表紙の左側に墨書の外題、中央に朱書の外題が書かれている。実俊が五十一歳の折に校訂していて、全体に激しい修正があり、墨滅も多い。奥書から見ると、一冊を丸一日で校合・校正していることが確認される。

奥書は多くないが、代表的な寛文八年（一六六八）のものを二点挙げておく。

- ①寛文八年三月十三日 一晚之間校合了

探題法印実俊^{五十一才}（玄義第一聞書）

②于時寛文八年孟夏初七本疏一覽之序加校合了

探題法印実俊^{五十一才}（玄義第二見聞）

Dの妙法院門跡藏本は、『龍華藏北藏聖教目錄』（以下、『妙法院目錄』と称す^⑦）に記載されており、表の（ ）内の（景7）などの分類は、『妙法院目錄』での所蔵番号である。

妙法院門跡藏本は、『三大部見聞』『三大部述聞抄』などと称する。法量は、縦二七・〇×横二〇・一糎。表紙は縹色無地で、袋綴、料紙は楮紙打紙で、一面十行書きである。全一三三冊の内訳は以下の通りである。

- ・玄義見聞 一九冊（景7）
- ・文句見聞 一八冊（辰3）
- ・止観見聞 三三冊（宿2）
- ・玄義述聞 二二冊（列1）
- ・文句述聞 二三冊（張1）
- ・止観述聞 二二冊（列6）

奥書は、十七箇所に見られる。最も古いものは次の正保元年（一六四四）のものである。

正保元年[〓]極廿八書写之

（摩訶止観第一私聞書、列6―6）

一方、最も新しいものは以下の、万治元年（一六五八）の奥書である。

万治元年極月八日以東塔院本書写之

同十日以同本一校了

堯恕

(止観第一見聞、宿2—5)

書写・校訂している堯恕法親王(一六四〇—九五)は、後水尾天皇の第十皇子で、正保四年(一六四七)十二月、堯然法親王の資として妙法院に入室、慶応三年(一六五〇)二月に親王宣下を受ける。妙法院を相続し、三度、天台座主に補せられた。英明の資があり、天台教義の研究や經典・史伝の講習に力を注ぎ、自身で多くの書写も行った。妙法院門跡龍華藏の蔵書の骨格は、堯恕法親王の書写・収集によるものである。

その他、記事が詳しく年記の確認できる奥書を挙げると、以下のものがある。

①右為令法久住以三院衆談此三大部述聞全部為山門永代重宝

被調之砌此一冊楞嚴院沙門蓮城坊写之畢

于時正保二年卯月廿六日筆功畢沙門乘盛

(止観第三聞書、列6—10)

②正保乙酉年卯月七日於宝幢院南谷観泉坊写功了

右筆乘盛俗年八々
戒年五々

(止観第六述聞抄、列6—17)

③寛永十七年八月三日依大僧正貴命

筆者蓮花院見海書之

交合三周房

正保二年卯月十日於觀泉房書之

(止観第八私聞書、列6—18)

①③は、正保二年(一六五四)の書写である。②の正保乙酉年とは正保二年で、同じ年のことである。なお③の寛永十七年(一六四〇)の元奥書は、現在の別当代蔵本の奥書とは一致しておらず、天海の要請で書写した時の奥書である可能性がある。

以上のことから、妙法院門跡蔵本は、正保元年(一六四四)～万治元年(一六五八)にかけて書写された伝本であることが確認できた。

Eの西教寺正教蔵『三大部見聞』『三大部述聞』は、全一二三冊で内訳は以下の通りである。

- ・止観見聞 二四冊(本疏一番箱・二番箱)
- ・止観述聞 二二冊(本疏三番箱)
- ・玄義見聞 一三冊(本疏四番箱)
- ・玄義述聞 一三冊(本疏五番箱)
- ・文句見聞 一六冊(本疏六番箱)
- ・文句述聞 二五冊(本疏七番箱・八番箱)

法量は縦二七・一糎×横二〇・二糎で、表紙は栗皮無地、外題はナシ。料紙は楮紙打紙で、一面十行書、隠丁付がある。これらの書式は、別当代蔵本、戒光院蔵本、毘沙門堂蔵本、園城寺蔵本、妙法院蔵本と同じである。

伝本の一覧になく、表に入れた『見述目録』は、叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目録』に所載されている『三大部述聞見聞』の情報である。⁸⁾『三大部述聞見聞目録』は、西教寺正教蔵にも所蔵されていて、西教寺本の方が書写年代が古い。

三、『三大部廬談』の内容と講述年表

『三大部廬談』には、講述した年月日が克明に記されているため、講義の日付と内容が確認でき、進度もわかる。談義の実態がうかがえる貴重な記録でもある。この年記をもとに講義の整理を試みたのが次の年譜である。

〔表二〕『三大部廬談』講述年表

和暦	西暦	月日	内容	明導照源年齢
暦応三年 ～康永三年	一三四〇 一三四四	四月一六日～ ～五月二日	止観第三 ～止観第十	四三歳 四七歳
貞和二年	一三四六	四月二九日～五月二二日 六月晦日～七月一八日	玄義第二 止観第五	四九歳
貞和三年 ～観応元年	一三四七 一三五〇	六月五日 七月一日	止観第二 ～止観第十	五〇歳 五三歳
観応元年 ～文和二年	一三五〇 一三五三	七月一六日 六月二七日	玄義第一 ～玄義第十	五三歳 五六歳
文和三年 ～延文二年	一三五四 一三五七	四月一六日 八月二日結願	文句第一 ～文句第十	五七歳 六〇歳
延文四年 ～貞治六年	一三五九 一三六七	八月九日 七月三日	文句第二 ～文句第十	六二歳 七〇歳

『三大部見聞』について、明導照源による三大部の講義が最初に確認できるのは、暦応三年（一三四〇）四月十六日のことである。時に明導照源は四十三歳であった。その後、毎年の夏安居に講義を続け、最後の講義である貞治六年（一三六七）七〇歳に至るまで、止観は三巡、玄義は二巡、文句は二巡している。「表二」は、現存本から確認できたものになるため、最初が暦応三年の止観第三からの記録しかないが、その前年に、止観第一・第二を講義している可能性はある。また貞和二年は玄義第二と止観第五の講義をしているのが不審である。また延文三年の記録がないが、延文二年に文句第十で結願、延文四年は文句第二となっているので、延文三年は文句第一を講義していた可能性が考えられる。貞和二年だけは例外的であるが、他の年は、皆、玄義・文句・止観を、数年かけて第一から第十まで講義していることが確認できる。

また日付を精査していくと、夏安居の期間内は、毎日講義が行われていて、よほどのことがない限り、休講をしていないことが確認される。例外的な休講には、次のような記録がある。

①貞治四年（一三四八）七月九日～十一日条

已上三ヶ日大宮小鳥居辺倒木、当谷ヨリ西塔北尾両方立義者相論之間、被擱之

②貞治四年七月十九日条

御談義最中午尅竹林院炎上之間、被擱之

①の記事は、貞治四年（一三四八）七月九日から十一日にかけての三日間、大宮小鳥居辺りで倒木があり、当谷（東塔南谷）から西塔北尾の両方の堅義者の相論となったために談義が中断、また②の記事は、同じく貞治四年七月十九日に、竹林院が火事となったため、談義が行われなかったということであろう。

次に中断が確認できるのは、『文句第十本書聞書』の貞治六年（一三六七）七月二十三日条で、

廿三日依廬山寺御所勞御談義被擱之畢。

とあり、廬山寺上人照源の体調不調によって中断するが、この時照源は七十歳。その翌年貞治七年（一三六八）に七十一歳で亡くなることになる。こうした特別な事例以外は、休講なく、毎日談義を行っていることがこれらの記録から確認できるのである。

さらに詳しい講談の日時については、紙幅の関係から、別稿に記す。

四、『三大部廬談』諸本の伝来経路

現在、天台諸寺に伝わる『三大部廬談』は、信長の焼討の後、叡山復興にあたつて集められたものである。元龜二年（一五七二）に織田信長が比叡山を焼討したことによって、比叡山の典籍が焼失することとなった。その後、天海が比叡山の再興をはかつていくが、その折に『三大部廬談』が天台寺院には無かつたためか、寛永十六年（一六三九）、天海の請いに応じて、徳川家光が幕下に命じ、日蓮宗の頂妙寺（京都市）が所蔵していた『三大部見聞』『三大部述聞』を書写し、日光輪王寺の宝物とするべく布達した。依頼された頂妙寺の方では、書写は許可したもの、門外不出の本であるため貸し出しはせず、来寺しての書写のみを許すこととした。そこで比叡山から僧が出向いて書写することとなった。山門正善院が僧侶五十九名を連れて行き、二年をかけて百三十余巻を書写したという。これによって比叡山においても『三大部廬談』を所持できることとなったのである。

その後天海は、本書を重書として扱い、三塔の政所に順番に書写管理を命じた。そのいきさつやその後の管理記録は、叡山文庫生源寺蔵『本書見聞述聞并卷数目錄』写一冊として遺されている。この書には「寛永十九年（一六四二）三月十八日山門探題天海」の奥書があり、天海の割印まで押されている。天海の直接の指示で転写が行われており、少

なくとも五回の書写が確認できる。この厳密な管理の様子から、天台の重書として大切にされたことがうかがわれる。

〔表三〕『三大部廬談』書写年表

和暦	西暦	項目
永禄二二	一五六九	九月十二日、『文句聞書』の書写が行われる（身延文庫蔵丙本）。
元亀二	一五七一	九月六日・十八日、『文句聞書』の書写が行われる（身延文庫蔵丙本）。
元亀二	一五七一	九月十二日、織田信長が比叡山を焼討する。
天正五〇七	一五七七	『文句見聞述聞』を玉泉房日安が書写する（身延文庫蔵甲本）。
天正二三	一五八五	『文句述聞』を書写する（身延文庫蔵乙本）。
寛永一六〇一七	一六三九〇四〇	徳川家光が命じて日蓮宗頂妙寺の本を書写し、日光輪王寺の宝物とする。
寛永一七〇一九	一六四〇〇四二	比叡山内で書写が行われ、山門首楞嚴院蔵本（現在の別当代・戒光院蔵本）となる。
寛永一九	一六四二	天海、『三大部廬談』の管理と転写を指示、三塔が交代の管理となる。（生源寺蔵『本書見聞述聞并卷数目錄』）
寛永二〇	一六四三	芦浦観音寺舜興、『三大部廬談』を書写する。
寛永一七〇正保二	一六四〇〇四五	山門首楞嚴院本を書写し、園城寺本（旧聖護院本）となる。
正保元〇万治元	一六四四〇五八	山門東塔院本を書写して、妙法院本ができる。
承応二	一六五二	芦浦観音寺舜興、『三大部廬談』に不足する巻を寛永寺本で書写して補う。
万治元	一六五八	十月中旬、玉林房堯雅が『三大部述聞見聞目錄』を書写する。
寛文元	一六六一	九月、斑鳩寺寂阿が『三大部述聞見聞目錄』を書写する。
寛文七〇八	一六六七〇六八	叡山文庫真如蔵本ができる。

この年表は、『三大部廬談』の諸伝本A～I本において確認できた事項を整理したものである。信長の焼討後に、天海・家光による『三大部廬談』の再入手を契機として天台寺院に広がっていった。園城寺蔵本（旧聖護院蔵本）は、奥書などの比較から、山門首楞嚴院蔵本を転写したものであることが確認できた。

また身延文庫に所蔵される三種であるが、いずれもどこでどの本を書写したものか、その伝来経路は全く不明ながら、頂妙寺から天海が入手するものとは全く別に、日蓮宗寺院内での書写が行われている点が興味深い。もとをたどれば、天台宗寺院に由来するものと思われるが、天台宗のどの寺院であるのか未詳である。現在、『法華文句』の廬談のみが伝わっているのが元来のことか未詳ながら、日蓮宗寺院では、三大部を講義したものとして重視する中で、とりわけ『法華文句』の注釈に重きを置いていたことが推測される。

また身延文庫蔵丙本は、その書写年代から信長の焼討と前後して書写活動が行われていたことが判明する。混乱の時代にどこで書写が行われていたのか、またこうした書写活動に、信長の比叡山焼討が影響したのか否か、興味深い。不明なことばかりであるが、ここでは可能性を指摘するにとどめ、今後さらに調査を進めていきたい。

五、園城寺蔵『三大部廬談（三大部見聞述聞）』について

先にも述べたが、『三大部見聞』『三大部述聞』の六部一揃いを完備したものは、園城寺、妙法院、叡山文庫真如蔵、叡山文庫毘沙門堂、叡山文庫別当代十戒光院、西教寺正教蔵の六蔵のみである。

園城寺蔵本（旧聖護院本）は、『洪谷目録』などの目録類に記載がなく、これまで把握されていなかった貴重な伝本である。妙法院蔵本や西教寺正教蔵本と比較して、大部の冊を二冊に分けたり、合冊する組み合わせ方が異なるなど調卷の違いはあるが、内容はほぼ一致している。（互いに多少、重ならない、一致しない冊がある。）

園城寺蔵『三大部廬談』は、全部で百二十六冊を数える。玄義のうち、見聞が十八冊、述聞が十二冊の合計三十冊。文句は、見聞が十七冊、述聞が二十五冊の合計四十二冊、止観は見聞が三十一冊、述聞が二十三冊の合計五十四冊、総計百二十六冊という構成である。(表二)を参照)

表紙は縹色無地で、法量は縦二七・五×横一九・七糎、料紙は楮紙の打紙で、装訂は袋綴である。各冊の頭に、「道寛」と「聖護院蔵書印」の朱印が押されている。

聖護院道寛(一六四七～七六)は、正保四年(一六四七)四月二十八日生まれで、後水尾天皇の皇子、母は逢春門院である。明暦二年(一六五六)に親王となり、嘉遇と名のる。翌年出家して、道晃親王より受戒した。寛文八年(一六六八)二十二歳の時に、一身阿闍梨、園城寺長史となった。延宝四年(一六七六)三月八日に、三十歳の若さで亡くなってしまう。道寛は若いときから碩学で、『妙法蓮華經聞書私』や『天台四教儀集解聞書私』(一六六四年)などの著作がある。園城寺唐院本『尊談文集』写本五十冊を一緒に携えていたものと思われる。『尊談文集』とは、尊舜(一四五一～一五一四)による天台三大部を論じた問答の書で、依証文を集めた論義書である。⁽¹⁰⁾

園城寺蔵『三大部見聞述聞』から確認できる奥書を以下に示す。

①寛永廿一歴八月日 十禅寺宮 良行書之

(内題「止観第一聞書」(止述1))

②寛永廿一曆七月廿四日 書写十禅師宮 良行

(内題「止観第一聞書」(止述3))

③于時寛永十七年八月上旬

山門横川首楞嚴院於食堂書寫畢

筆者豪賢

(内題「止観第一聞書」(止述5))〔写真1〕

④于時寛永廿一年極月上旬五日 筆写 慶庵

(内題欠(止述6))

⑤于時寛永廿一年極月吉辰 書写畢 筆者慶安

(内題「摩訶止観第一私聞書」(止述7))

⑥正保二年中春廿三日書写畢 日吉十禪師 良行書之

(内題「止観第二聞書」(止述9))〔写真2〕

以上の奥書から、寛永十七年(一六四〇)～正保二年(一六四五)にかけて書写したものと確認できる。注目すべきは③「止観第一聞書」で、これによれば、山門横川首楞嚴院の食堂において書写したとある。頂妙寺本を書写した首楞嚴院本を、書写した伝本である可能性が考えられるのである。

なおその他に、他の伝本と比較した時に、書写の形式、料紙の質、隠丁付の位置など、妙法院蔵本や西教寺正教蔵本と酷似している点が指摘できる。つまり、園城寺蔵本の書写・製本は、妙法院蔵本や西教寺正教蔵本の作り方と同じだと思われる、当時の書写方法が想像できて注目される。どこで誰が書写をし、料紙はどのように用意し、製本はどこで行うのかなど、今後その実態を解明していきたい。

六、身延文庫本『三大部廬談』三種（甲・乙・丙）について

日蓮宗の総本山身延山久遠寺の身延文庫には、『三大部廬談』が三種所蔵されている。

甲『廬談 文句』 写本六冊（台見3―2）

乙『述聞抄』 写本三冊（台見3―1）

丙『三大部見聞』 写本一八冊（日任1＋日任8）

甲の『廬談 文句』は、写本六冊である。〔第一冊〕文句第二聞書、〔第二冊〕文句第三本書聞書、〔第三冊〕文句第三聞書、〔第四冊〕文句第三聞書／文句第三聞書、〔第五冊〕文句第三本書聞書、〔第六冊〕文句第四本書聞書となっている。全六冊は、文句見聞（第二―四）四冊と、文句述聞（第三）二冊となっている。

書写奥書が示されているところを挙げると次のようになる。

〔第一冊〕 天正五^丁正月廿六日書畢

〔第五冊〕 天正七^{（マ）}二月廿五日 燈下注了〔写真3・4〕

〔第六冊〕 天正七^卯

二月十二日書畢

注目すべきはその年代である。天正五年（一五七七）と天正七年（一五七九）の書写本であって、比叡山に伝わる諸本が寛永年間を過ぎたものばかりであることと比較すると、書写年代がずっと古い、中世の写本なのである。

乙の身延文庫蔵『述聞抄』は、写本三冊である。三冊とも『文句述聞』である。〔第一冊〕は文句第一聞書、〔第二冊〕は文句第二述聞、〔第三冊〕は文句第四聞書である。この書写奥書も古く、〔第二冊〕には、

于時天正第十三乙酉八月五日〔写真5〕

とあり、天正十三年（一五八五）に書写されたものとわかる。

丙の身延文庫蔵『文句見聞』『文句述聞』十八冊は、最も書写の古いものである。その中からは、「永禄十二年（一五六九）九月十二日」の奥書、「元亀二年（一五七二）九月六日〜十八日」の奥書が確認された〔写真6〕。特に元亀二年のものは、元亀二年九月十二日が、織田信長による比叡山焼討の日であることから、それとほぼ同時、あるいは前後しての書写活動が行われていた点で注目される。身延文庫蔵本は、すべて中世の写本であることから、今後内容の精査を行っていきたいと考えている。

七、おわりに

以上、『三大部廬談』（『三大部見聞述聞』）について、諸伝本を確認することによって概要を整理した（〔図〕）。廬山寺の教学は、中世の天台談義書において「廬師云」「廬談」などとして引用され、重用されていたが、『三大部廬談』は冊数が多く構成も複雑で、すでに江戸時代前期には混乱が生じ、当時からその整理に苦慮していた形跡がうかがわれた。この度、諸伝本全九種十目録の閲覧することが可能となり、ようやくその全容がつかめることとなった（〔表一〕）。『三大部廬談』の構成を確認し、記載されている講述の年時から講述年表を作成し、照源が四十三歳の時から最晩年まで、毎年の夏安居で講説した内容を整理した（〔表二〕）。

また各写本の伝来を確認し、『三大部廬談』の書写年表を作成した（〔表三〕）。その結果、永禄・元亀・天正年間頃

に日蓮宗内での書写が重ねられていたことが判明した。また天台宗の方では、比叡山焼討後、復興をはかる天海の要請によって日蓮宗の頂妙寺所蔵本が書写され、比叡山内で大切に管理され、書写されていった。現存する諸伝本の分析から、諸本の成立状況を考察すると、現存の写本類は、この比叡山内での書写本を元に行っていることが推定される。ただし、園城寺本と他本を比較し、詳細に見ていくと、直接の伝本関係を比定するには若干の疑問もあり、伝本関係の過程を解明するところまでは至らなかった。

今後には多くの課題を残しているが、本稿では、諸伝本の整理を行い、その概要を提示することのみ行なった。今後は、さらに諸伝本の分析を深め、また『三大部廬談』の各条の論目や内容の分析を進めていきたいと考えている。

註

- (1) 洪谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』（法蔵館、一九七八年、増補版）。以下『洪谷目録』と略す。
- (2) もっとも古いものは、正安三年（一三〇一）六月十三日から行われ、西塔北谷双照坊が筆録した「述聞抄（玄義第七）」である。照源の生没年は一二九八年～一四六八年で、同時代ではないことがわかる。
- (3) 西教寺正教蔵『三大部述聞見聞目録』は、万治元年（一六五八）玉林坊堯雅の写本で、慶安年中（一六四八～五一）に山門西塔院の『三大部見聞述聞』を書写したところ、混乱が生じていることに気付き、見聞・述聞の振り分けをし直したり、尊契談や奥談の弁別を行うなどをした。そして各冊を談義の年月で並べ、目録化している。叡山文庫戒光院にも『三大部述聞見聞目録』（寛文元年（一六六一）斑鳩寺寂阿の写本）がある。
- (4) この他、頂妙寺（日蓮宗、京都市）は、徳川家光が書写させた原本を所蔵している可能性があるが、まだ所在は確認できていない。
- (5) 『洪谷目録』では、『玄義見聞』イ叡山文庫真如蔵本、ロ叡山文庫毘沙門堂蔵本、ハ西教寺正教蔵本、ニ妙法院蔵本、ホ天台宗全書十九『玄義述聞』、イ叡山文庫真如蔵本、ロ叡山文庫毘沙門堂蔵本、ハ西教寺正教蔵本、ニ妙法院

藏本（以上玄義、三三頁）、『文句見聞』イ叡山文庫真如藏本、ロ叡山文庫別当代藏本、ハ西教寺正教藏本、『文句述聞』イ叡山文庫真如藏本、ロ叡山文庫別当代藏本、ハ西教寺正教藏本、ニ妙法院藏本、『文句問書』イ叡山文庫別当代藏本（以上文句、四二頁）、『止観見聞』イ叡山文庫真如藏本、ロ西教寺正教藏本、ハ叡山文庫毘沙門堂藏本、『止観述聞』イ叡山文庫真如藏本、ロ叡山文庫別当代藏本、ハ西教寺正教藏本、ニ妙法院藏本（以上止観、五二頁）と分けて記載する。Aの戒光院藏本と、F園城寺藏本、GHIの身延文庫藏本は、『洪谷目録』には未掲載である。

(6) 叡山文庫調査会編『叡山文庫毘沙門堂聖教目録』（叡山文庫調査会、二〇一〇年）にも掲載されている。

(7) 妙法院門跡編『龍華藏北藏聖教目録』（妙法院門跡、二〇二一年）による。

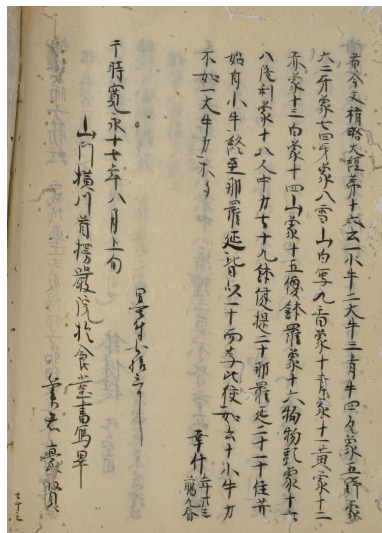
(8) 『三大部述聞見聞目録』については、拙稿「廬山寺談『三大部見聞述聞』の享受に関する一考察——付・〔翻刻〕叡山文庫戒光院藏『三大部述聞見聞目録』——」（弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』創刊号、二〇一六年八月）に詳しい。

(9) 生源寺（追記）（内・一三八・一三四六A）。

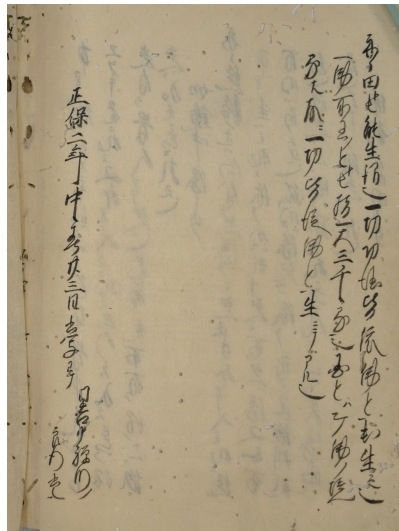
(10) 『尊談文集（尊談）』については、渡辺麻里子「尊舜編『尊談』について」（『天台学报』四五、二〇〇三年十一月）、渡辺麻里子「『尊談』の諸本および題目について——〈付〉翻刻・叡山文庫真如藏『尊談目録』——」（『日本仏教総合研究』三号、二〇〇五年五月）などに詳しい。

〔付記〕 貴重な御本の閲覧を許可してくださいました、園城寺、身延山久遠寺、西教寺、叡山文庫の各位に心より御礼申し上げます。

本稿は、科学研究費C「園城寺所蔵天台関係聖教の調査による中世天台談義書を生成するネットワークの解明」の成果による。



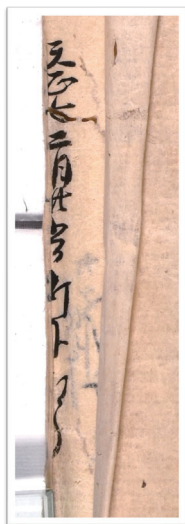
〔写真 1〕園城寺蔵本『三大部廬談』「止観第一聞書」（止述 5）奥書



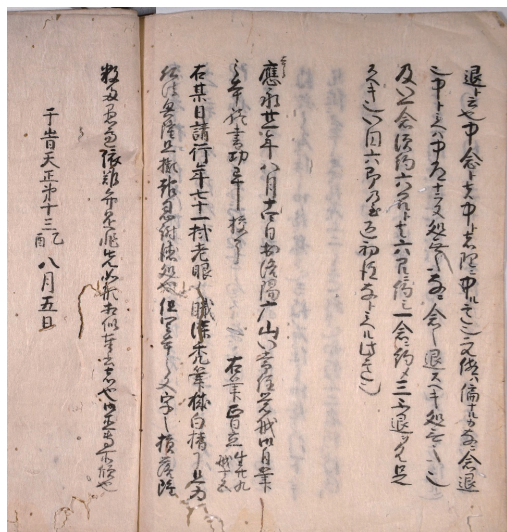
〔写真 2〕園城寺蔵本『三大部廬談』「止観第二聞書」（止述 9）奥書



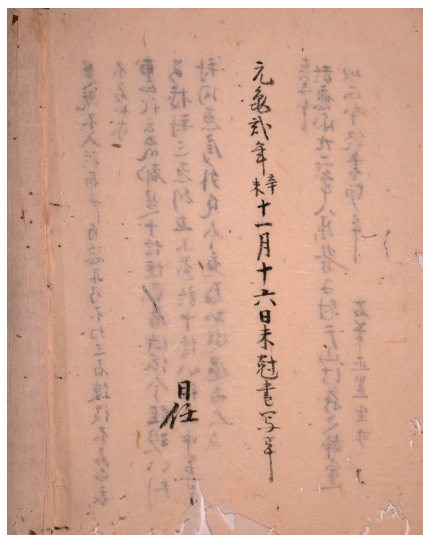
〔写真 3〕 身延文庫蔵甲本『廬談 文句』第五冊奥書



〔写真 4〕 身延文庫蔵甲本『廬談 文句』第五冊奥書拡大



〔写真5〕身延文庫蔵乙本『述聞抄』第二冊 奥書



〔写真6〕身延文庫蔵丙本『廬談』第十六冊奥書